

なぜノンフィクションを書くのか

今関 信子

『日本児童文学』編集委員会からの執筆依頼は、「なぜノンフィクションを書くのか」というタイトルでした。タイトルに触発されて、私は自分に問うことになりました。フィクションの分野でも、作品を書いているからです。

私は、具体的に体の中をとった素材から、作品を組み合わせることが多いのですが、フィクションとして作品化する場合、登場人物に一人のモデルさえ持たないこともあります。具体的に体験した出来事を描きながら、描きたい世界、明確にしたいテーマを意識しつつ、作品世界を組み上げていくからです。

ノンフィクション作品は、事実を即して、レポーターの目で取材し、それを、写真家が写真を撮るように、目の前に起こっている出来事を、言葉で描こうとしていると思います。

正直に言いますと、『神戸っ子はまけなかった』を書くまで、私は、ノンフィクション作家と言われるたびに、あ

る種の引け目を感じていました。フィクションの方が文学的に上という感じがあったのです。が、この作品を書いてから、私は、ノンフィクションの書き手として、この分野に全力で取り組むようになりました。

『神戸っ子はまけなかった 阪神大震災とのたたかい・苦難と感動の記録』は、阪神淡路大震災のすぐあとに書いた作品です。あの地震は、一九九五年一月十七日に起きました。滋賀県に住む私は、JRが復旧して神戸に入れるようになった日から、毎日、神戸のボランティアセンターへ通いました。その時、何かの用事で出版社の人が、自宅に電話を掛けてきたらいいのですが、何回掛けてもいつも留守。おかしいと思いかけた時、電話が繋がった。「どうかしたのですか」「ここ一カ月ほど、炊き出しに行っています」「では、そのまま取材して下さい」編集者の言葉を受けて、ボランティアセンターの活動が閉じたのを期に、私は取材に入りました。何もかもごちゃごちゃで、何を取材するのかも決まっていないうちでの取材です。ひたすら歩きます。テント村やにわかになできた案内所や避難所になった学校などで、話を聞きました。胸を締め付けられる出来事や重い課題を心に留めました。感動したエピソードもありました。たくさんの方の事実のあるなかで、私は、特定のことには心のカメラを向け、シャッターを切るようになります。その時、私は読者は子どもだと強く意識していました。しかし、子